

巻頭言

病院事業管理者 中川 洋

当院は、市民の要請に応えるべく、急性期病院としての役割を懸命に果たし、24時間365日、市民の安心、安全を守る救命救急センター、さらには、若い医師を育てる臨床研修指定病院の役割など、職員は誠に多面的で多忙な毎日を過ごしています。時代が医療に求めるもの、そして、患者と医療者の関係は急速に変化しつつあり、変革の速度が余りに速いことに戸惑いを感じる向きもあるでしょう。そのような中で、我々の本来業務は、あくまでも日常の診療そのものにあることをしっかりと心に留める必要があります。患者の満足、納得が、同時に我々医療者にとっても喜びになるような病院でありたい、と常々願っています。

多忙な日常診療の合間に論文をまとめ、これを継続的に発刊し続けていくことは大変困難なことであります。昭和34年に発刊された仙台市立病院医学雑誌は、第7巻で一旦休刊した後、昭和55年に病院が現在地に移転する際、新たに第1巻1号として再刊され今日まで続いています。編集委員各位に感謝申し上げますと共に、多忙な中で論文としてまとめ上げ、投稿された皆様の努力と熱意に敬意を表するものであります。

仙台市立病院医学雑誌、第23巻には20論文が収録され、原著3編、症例報告11編、コメディカルレポート6編、その他にセンター症例検討会報告例が6編です。巻末の業績目録を見て分かるとおり、本院の臨床研究は活発に行われており、主要な研究成果の多くは内外の一流誌へ投稿されております。しかし、医学の専門化が進み、医学雑誌も内容が狭い分野に特化され、広い領域にわたる臨床的な論文を掲載する雑誌が少なくなっている昨今では、仙台市立病院医学雑誌のような存在がかえって貴重になっている感があります。地域の中核病院でなければなし得ない疫学調査、先進医療の地道な検証、臨床経験に支えられた総説、貴重な症例報告、コメディカルレポート等を活発に発信していくことが本誌の特徴であると云えます。

インターン制度が昭和43年に廃止されて以来、医師卒後臨床研修が平成16年4月、実に36年ぶりに必修化されます。これまで臨床研修病院の指定基準として重要視されてきた剖検数は、実状に合わなくなってきました。新しい制度では、当院のように質の高いCPC、病理カンファレンス等を数多く、継続的に行ってきた実績が評価を受けることになります。加えて、国際疾病分類(ICD10)による疾病統計が、DRGや診療報酬体系上からも必要かつ不可欠になってきます。来年度の第24巻にはこれまでの内容に加え、新しく詳細な疾病分類統計が掲載されることになるでしょう。当院における臨床研究を記録し続けてきた本誌が、診療の質を担保するものとして、益々存在価値を高めていくものと期待しております。